失楽、そして終る世界

葉桜照月

砂漠。

私は今、ここにいる。

1日目

手記を書いてみようと思う。

でないと、どうかしてしまいそうなんだ。

私は、死ぬのが怖い。そして、この世界に何らの爪痕も残せず死んでいくのが、怖い。

こんな世界でも、未来に誰かが私を知ってくれるなら、私を理解してくれるなら、それほど嬉しいことはない。だから、手記を遺したい。読まれたい訳じゃないが、読まれる可能性は、残したくて仕方がない。読まれることより読まれないことの方がずっと嫌だ。

読んでもらう、知ってもらう以上、私のことを書き記さなければならない。私の名前は、遥佳――喜音家遥佳。いや、今はもう、鐘ケ江遥佳だ。

この上の部分の違いはなにか、先に説明しようと思う。これ、つまり苗字というものは、「ケッコン」という儀式を経ることで変わるらしい。この儀式は、既に消滅した文化だ。二人の人間が愛を誓い、財産を共有して生きていくのだという。私は、ある男……鷹介という男と、この儀式をした。本来変わるべき苗字は、それを伝える相手が何処にもいないので、苗字を共有していることは私たちだけの秘密だった。

この儀式を経た二人は、「フーフ」と呼ばれるグループとして扱われるらしい。そして、驚くべき事に、フーフになると、新たに人間を生産できるというのだ。私は、これを眉唾物だと思わざるを得ない。私たちはフーフとして20年近く活動をしているが、その傾向はないからだ。しかし、虚言というには無視できないほどに、古代文献

に記述は多い。女性が生産できるらしいが、生産には男性の助力が必要なのだという。
だが、これを読んでいるあなたの時代がどうかは分からないが、この時代において、人間は、ありがたくも機械胎という機械が生産してくれる。大きな機械だ。精密な機械だ。それが漸く出来ることを、人間が可能だとは思えない。
確かに、原初の機械を人間が組み上げたものだとするならば、機械胎の発明以前にどのような手段で人間が生産されていたのか説明がつかないが、結局何が正しいのか私にはわからない。どちらにせよ、機械胎はもう何百年も前からこの役割を担っている。それだけはほぼ間違いがない。人間は機械から生まれた。私含め、この時代の人間は誰だってそうだ。

だが、機械には整備が必要だ。世界中に一千体ほどある機械胎には、それぞれ整備のための機械と、その整備機械を整備する機械が付随している。
だが、整備機械の整備機械を整備する機械はない。そして、整備のための技術は失われている。何百年もかけて人間が機械にべったり重心を預けた結果、立ち上がることが出来なくなってしまったのだ。その結果、整備機械整備機械は壊れ、整備機械も壊れた。そして今、機械胎もとうとう、壊れようというところまで来ている。既に世界には動かなくなった機械胎もあるらしいが、少なくとも、私が生まれてきた機械胎は、まだ「人間を生産する」という機能を保持していた。

しかし、動かないことと壊れていることは同じではない。私を生んだ機械胎は、動いてはいたが、壊れていた。

詳しくはわからない。きっとこの時代には誰も分かる人間などいない。だが、何の偶然か、私は、同じ時期にあの機械胎から生まれてきた人間たちの何倍も賢いのだ。思考力、記憶力、その他諸々、私だけが突出して高いのだ。確か、遺伝子、と言うのだっけか、多分その辺の調整ミスだろう。既にあの機械胎も、ゆっくりと壊れて行っている、その第一の症状として、私がいるのだ。

機械胎は養育施設とセットだった。機械胎はひと月に二人の人間を生産することができ、そして養育は人間の見た目をした機械がやっていた。それは壊れていなかったと思う。精密じゃなかったのだろう。15年かけて言語と簡単な文字、コミュニケーション、そして加減の計算を教えてくれた。だが、私には最初の7年で十分に理解できることだった。だから残りの8年は、立ち入り禁止の資料室に忍び込んで本を読んではつまみ出されるという毎日を送っていた。
資料室には、どうやらあの機械胎が稼働を開始してからの来歴や、それよりも前の時代の情報などが書かれた本が大量にあった。ほとんどが難しい文字で書かれていて読めなかったが、半分はなんとか解読した。その知識を活用してこの文章を書いているから、この手記を読んでくれているそこのあなたには申し訳ないのだが、この文章そのものは私の時代よりも前の文法や文字を多用していることを御理解頂きたい。

養育施設を出る頃にはすっかり、全くもってどうでも良い、この世界を生きていくにはまるで必要のない情報ばかりを身につけてしまった社会不適合者になっていた。でもそれは社会にとってはの話であって、私にとってはの話ではなかった。というよりも、当時の私は、それが全人類に必要で、必要性に気付いているのは私だけなのだから、あらゆる人に啓蒙をしようと考えていた。だが、もちろん、必要性に気付かない者達に馬鹿正直に必要性を説いたところでどうなるか、分かりきっていた。当時の私は分かりたくなかったのだが。
その過程で、私は自分が考え事をするのにもっとも良い状態と、自分よりずっとモノを知らない連中と交流するのにもっとも良い状態を、完全に意識して分離できるようになった。……いや、あくまでも交流のための余所行きの人格が発生したと言った方が正しい。二重人格になったのだ、私は。
これは都合が良かった。切り替え先に交流をすべて任せて、考察に文字通り全てを費やすことができたからだ。

……うう、寒い。
昼はあんなにも暑いのに、夜ときたら。

鷹介は今もそこで寝ている。この劣悪極まる急造塹壕テントの中で、ぐっすりと、眠っている。
私達はこの世の理不尽に耐えかねて逃げだしてきた。
養育施設しか人間を統一する機関がない以上、そして施設に統一されることが当然の行動のひとつである以上、それに逆らうなどできはしない。だが、それは私にとっては理不尽であり、そんなものに従って堪るか、と思った。少なくとも、養育施設によって釜茹でにされて人生を終えたくはないのだ、私は。それを当然だと思ってい

る連中を、私は好きに慣れない。

機械でしかないのだ、奴らは。

何故、有り難がるのだろう。

人間はいわば理性と本能とを操る、二輪車の乗り手だ。獣は理性を持たず、機械は本能を持たない。この点で連中は一輪車に乗っているといえる。二輪車の方が安定しているのは火を見るよりも明らかだというのに、一部の人間どもは、機械を崇拝している。

崇拝するというのは、その物事が自分にとって不可知だと認めることだ。何が悲しくて自分ら人間より明らかに不安定なものを自分より上位だと思わなければならないのだろうか。

人間は決して完全無欠では無い。

獣に、機械に、人間より優位な部分があるのは知っている。しかし、同時に、人間が彼らに対してすぐれる部分もまた存在する。

人間でありながら人間を貶め、人間は罪深い存在であると糾弾し、人間以外の者に救いを求めて自ら変わろうとしないアホどもは、人間の創造的資質を全く軽視している。もとより、万物はすべて不完全だ。故に、神はいない。好き好んで創造物を不完全にするような意地の悪い造物主は、悪魔と呼ばれるものだからね。

……話が飛んだ。ええと、私は養育施設を出て数年の間は理解者もなく孤独に暮らした。慣性だけで続く空虚な賑わいを見せる街にしばしば赴いては、別の客にこう問うたものだった。「〇〇についてどう思うか」、と。

それを聞いた奴はだいたい無視するか知らないと言って終わりだったのだが、しばらくして、地域で唯一残った喫茶店に行った時に、はじめて私の求める水準に近い人間を見出だすことが出来た。

その男が、稀音家鷹介であった。

私ほど重いものではないにせよ、彼もまた異常を持って生まれていたのだと思う。だから私は彼とすぐ意気投合して、そうして今まで、私の思索を手伝ってくれたのだ。論議の相手として。外との関わりの中継として。彼はずっと、私のそばにいてくれた。

私が、住んでいた街を放棄して、遠くにある門で共に果てないか、と提案した時、彼は、一日悩んで、了承してくれた。きっと、彼は悩んでいただろう。なんだかんだ言って楽しかった今の生活を、簡単に失ってもよいのか、と。それでも最終的に、私の意見に賛成してくれた。それどころか、過酷な環境であったこの砂漠において、積極的に私を手伝い、助けてくれた。だから私よりずっとよく働いて、私よりずっとはやく弱っていった。

昨日あたりから弱まりは特に顕著になって、ここ数日は前進を止めて偶然見つけたオアシスまわりの廃墟で休んでいる。今日は特にひどいようで、夕方に枯れかけの水を汲んで戻って来たらぐっすり眠っていた。体温は低く、体を冷やす必要はなかったと思う。それでも、喉の渇きを訴えていたから汲んできた水だったので、柄杓で水を一掬いして口を湿らせてやった。後になって、そのとき、驚いて起きるかもしれなかったと思うと、そうするべきではなかった、ぐっすりと眠っていてくれて幸運だったと思った。

……わかってる、わかっているさ。

……だが、今くらいいいだろう？

隣から寝息が聞こえてきた。

聞こえてきたんだ。

彼は寝ている。そういうことに、させてくれ。

なあ、聞いてくれないか。……いや、別に聞いていなくても良いんだが。

私は、ずっとこうして、他の人と違うように生きてきた。それを嬉しく思いこそすれ、恨みに感じた事はただの一度だって無い。こうして今、住まいから離れても。

ただ……君を巻き込んだこと、それだけが……負い目に感じてならない。ああ、きっとこれが、申し訳ないってことなんだろうな。

こんなことを呟いたところで、鷹介は聞いているはずもない。だが、それで良かった。今更になっても私は、何故だか、彼に申し訳ないと言うことが、気恥ずかしかった。

寝ている鷹介を起こさぬよう、静かにその場をたって、塹壕テントの外に出る。砂漠の夜風は、想像を絶して寒く、骨の芯を刺してくる。月と星が、私を静かに見守っていた。

砂丘に五体を投地して、虚ろな視線を夜空に向けた。

無限に興味が湧く才能を持って。
数百年前の叡知に触れて。
自分で物事を考えられると自負して。
それでもなお。
私はこんなにも無力でいる。

文明を復興させることも出来ないし、戦闘を止めることも出来ない。あまつさえ、大切な人を笑顔にすることすら出来ない。

最近になって再認識した。
特別っていうのは、普通とは違う…普通とは絶望的な差異があるってことを。
特別なんて言って一見素晴らしいかのように繕っても、その実は、永遠に孤独で、永遠に異端であり続けることが運命付けられた、哀れな仔羊に過ぎないんだ。

見上げると月と星がまだそこにいる。
しかし、彼らは、どうせ八方美人。私を見守っているのではなく、全人類を見渡している。私の事情など、知るはずもない。

センチメンタルな思考は留まることを知らない。きっと冷たい夜風のせいだ、と、言い訳をしておく。私を見てくれる者は、もう、いないんだ。

許してくれ。

2日目。

じゃあ、行ってくるよ。

3日目。

もうそろそろ目的地も近いと思う。道端に古代の立て札が残っていて、そこにはわけのわからないミミズ文字と、古代言語エンゲリスの文字が並んでいて、目的地がどこの方向でどれくらいかが書いてあった。多分、明日には着くだろう。

「私は今、本当に死にたいのだろうか？」
そんな事を時々考える。正直に言えば、今はよく分からない。今は、生きていてはいけないという思いだけだ。確かに、死ぬことは生きることに対する単なる逃避だかもしれない。自殺が卑怯だなんて、とうにわかっている。だが、私にとっては生きているほうが余程辛いんだ。

私が死にたいのは、世間のせいではない。ましてや、60近くなった老人をまとめて放り込んで処分する「釜」や、そんな恐ろしい制度を作った人間――機械かもしれない――のせいでもない。すべては自分のせいだ。無力な自分を許すことができない、自分のせいだ。私が生きるかどうかは私だけのものだし、私が死ぬかどうかもまた、私だけのものであるはずだ。
他人は、私の生や死に関与できない。ただ存在しているだけだ。だから、死ぬ理由を他人に求めたくはない。社会によって惨めにされても、誰かに大きな悩みを抱えていても、全てはその状況を脱却できない自分のせいなのだ。もし、自分以外の理由で死んだら、それは自殺じゃない、それによって遠隔操作で殺されたことと同じだ。
私の、たった一度の人生だ。終るときくらい、自分で決めさせてくれ。そう思うんだ。

4日目。

もう日没が近いころになって、私はとうとう、その場所にたどり着いた。

門。一千年近く燃えているとされる、火を噴く巨大な穴である。思っていたよりも大きく、資料で見たことのある計測結果と明らかに異なることから、ひょっとしたら大きくなっているのかもしれない。

ここに身を投げ込めば、私は。

夜になると、黒い空に緋が映える。息を飲み込むような綺麗さが、この世界の容赦のなさを引き立てている。もうずっとここにいたくなるかのような誘惑と、ここにいてはいけないという心の警鐘が、互いに殺しあっている。その先に残るのは、きっと虚無だけだ。ここにいたい。ここには一切のしがらみがない。だが、それは許されない。これは鷹介とした、何よりも大事な約束なのだ。私はもう既に、一緒に死のう、と持ちかけた出発時の誓いを破っている。本懐を遂げない限り、私は私を許すことはできない。

月すら、星すら、ほのかに赤い。地には血のような赤。篠突雨ですらもかき消せない、血潮のほとぼり。私の事は、これは歓迎されているのか、拒否されているのか。

5日目。

情けないことに、踏ん切りがつかない。誰かに追われている可能性はないから、たしかにいつまでだってゆっくりしていられる。

死んだあと、人間はどうなるのだろう。

もう、生きたものと会話することはできない。では、生きたものは知覚できないがそこにいるのだろうか？いや、それはあり得ない。もしそうだとしたら、過去からのたくさんの死者で、私の周りは覆い尽くされているはずだ。そして受容量が限界に達してしまう。死んだものと死んだものは、交流を作ることが出来るのだろうか？

過去の人間なら、この問いになんと答えただろう。きっと何かしらの答えを――きっと私にも分かるか分からないかの瀬戸際のようなものを――提示してくれるのだろう。知りたかった。特に今は。そう考えると、もっと昔に生まれてみたかった、強くそう感じる。

かつて、人間は動物から進歩し、知性を手に入れた。けれども、300 年前、機械によって為すべき事を失った私祖先は、やがて、武器を取り戦うようになった。知性を一段階失ったのだ。結果としてこの世界の文明は大きく後退した。それが私たちの時代なのだ。この傾向はどんどん悪くなっていくだろう。遠い未来にいつか技術が解決するだろうという望みさえも残されてはいない。技術はもはや、失われていくばかりなのだから……。

人類は、ゆっくりと死んでいっている。

その時代に、私は生まれたのだ。

その時代に、私は知性をもってしまったのだ。

そうでなかったら、いくらか幸せだっただろうに。

6日目

まだ踏ん切りがつかない。

何度もここに身を投げたくなるが、心残りがその度に浮かんでしまう。今日の懸案は、自分から終らせることの是非だ。

自分の末は自分で決めたい。だから自分は他人に殺されることを嫌って、失楽と放浪に出た。

だがそれは、自分で終らせることの肯定にはならない。野垂れていたってどうせ死ぬ。なのにどうして、自ら急いで死ななければならぬのか、と。

これは決して、私が生を求めているわけではない。

だが、私は、鷹介を殺している。

鷹介は、私のわがままに20年弱も付き合って、そして最後のわがままのために、誰も知らない砂漠の真ん中で、野垂れていった。空腹や痛みの襲うのも厭わず、私に恨みも残さず、また明日、何の異常もなくすっくと起きて笑いかけてくれるかのように、静かに目を閉じた。

私も、そうなるべきではないか？

7日目

彼は自分の手で終らせることができなかったのだ。

その彼を思い浮かべて、死ぬことなどできるのか？
どんな理由をつければ、それができるのだろう？

その彼を思い浮かべずに、死ぬことが許されるのか？
どんな理由をつければ、そんな傲慢が通るのだろう？

その彼を思い浮かべて、生きても良いのだろうか？
悔恨を背負い、彼が辿った道を忌避することが？

その彼を思い浮かべずに、生きても良いのだろうか？
すべて忘れることを、私は許せるのか？

わたしにはもう、どうすることもできないんだ。

8目日

誰か、私を見てくれよ。

頼むから。

誰か、私と話してくれよ。

誰か、私に答えをくれよ。

にちめ

会いたいよ、鷹介